

高等女學校と幼稚園

—(在學生のために、卒業生のために)—

(一)

高等女學校に幼稚園を附設すべしとの論は、必ずしも事めづらしき説ではない。既に有識者の間に唱められたことも一再ならず、また既に其の實施を見て居る處もある。しかも、我國全高等女學校中、現に其の附設あるもの幾校を數へ得べきか。吾人は更めて大に之れを希望せざるを得ないのである。

現行制度に於ては、女子の師範學校に幼稚園を附屬せしめて、生徒をして保育の實習をなさしめることになつて居る。而して其の目的は或は幼稚園保姆となり、直接保姆とならざるも其の管督者となるものゝ爲に、保育上の實際経験を與へ置かうとするにある。或は又、それ程に直接でなく

とも、初等教育者として幼稚園教育の大體の知識を得せしめようとするにある。即ち、いづれにしても教育者としての準備である。

高等女學校に幼稚園を附設すべしとの主旨は、之れとは必ずしも同一でない。或は或る場合に於て、之れと相類する結果になることもあるかも知れないけれども、一般としては、母たるの準備のためである。

高等女學校に教育の教科を課することは、隨意科ではあるが先づ多數に於て行はれて居る。而して、その目的が教師を作るためでなく、母たるの資格の一つとして教育に關する智識を與へるにあることは論を俟たない。高等女學校附屬幼稚園は此の目的の最も有効なる一助たらしめんとするも

のである。

高等女學校に於て、教育科として與へて置き度いことはいくらもあるが、子供を教育（平たく云へば世話をする）することの趣味、之れは是非與へたいことの一つである。勿論高等女學校生徒の年齢は、未だ充分此の趣味を理解せしめ得る時期でないと言へない人もあるかも知れない。理論上そう言へないこともない。しかし高等女學校少くも五年生が、子供といふこと、従つて其の教育といふことに就て可なり多くの興味を有することは事實である。導き様によつては、其の興味に訴へて此方面の可なり深みもあり、固定性もある教育が出來得るのである。しかも、今日の高等女學校の教育科は、其の點甚だ徹底して居ない。而して其の徹底せざる理由の一つは、教育といふことが餘り知識になり過ぎるからである。尙一層推し進めて言へば、教育の對象たる子供といふものが、餘りに學問的に取扱はれて、抽象的になり過ぎるから

である。而して此の弊を救ふための注意は種々考ふべきことがあるのであるが、附屬幼稚園を設けて『子供』と『教育』とを多少でも具體的に經驗せしめるのも最も効果多き手段である。

勿論、高等女學校の現行課程のまゝで、此のために充分なる時間を得來ることは困難である。根本的に革めなければならぬことになるかも知れない。しかし、出來得る限りの便宜を以て、或は幼兒と共に遊び、或は幼兒にお晰をなし、或は玩具の整理法、また其の與へ方、辨當の世話、身體検査の方法、此の位のことなれば機會を見ての實習も必ずしも困難であるまい。假りに又特殊なる經驗を與へ得ない迄も、その實際の甚だ容易ならずして、而して甚だ興味多きことなることを、實地の上に領得せしめることだけにても、効少からずと思ふのである。

(二)

高等女學校附屬幼稚園は、たゞに高等女學校在

學生のために用ゐらるゝのみではない。吾人の寧ろより多く其の價値を認めんとするは卒業生のためである。

高等女學校卒業者が、家庭に入つて主婦となる迄に尙ほ兩三年の準備を必要とする事情は、年を追ふて増加しつゝあると言つてよい。此の爲に女子の高等教育のための學校の設けらるゝ他に、各の女學校は、或は補習科其他の名稱のもとに此の機關を備ふることが普通になつて居る。而して之等の補習機關に於て、如何なる學課が補習せらるゝかと言へば、或は裁縫、或は理科學の如き學課である。之れ勿論大に大切なることである。しかも、此の折角の好期間を利用して、主婦の準備の他に母の準備として直接必要のことを補習するも、亦大に適當なりと信するのである。

此の目的のために、附屬幼稚園の充分自由に利用せられ易きことは、在學生のための場合の比ではない。或は志望によつては、幼稚園に於ける幼

兒取扱の實習を其の主教育となすも亦可なりである。而して、此の事は各自の母校に幼稚園の附設せられあるといふことによつて、始めて容易なり得べく、又おのづから奨勵せられ易いのである。

幼兒教育そのもの、方より言へば、斯くの如き練習生のために練習の具となることは必ずしも喜ぶべきことではない。しかし、それは暫くそれとして、練習をなす人には如何ばかり有益のことか測られない。假りに毎年の卒業生中、十人乃至十五人位の志望者を許すとせよ。之れ等の人々は、附屬幼稚園を中心として、子供の世話、教育に關する實地上及び實地に關聯する學問上の教育を受くること一兩年、その間に母として必要な諸技能を學び得るは勿論、更に此の實習を中心とする精神上の諸訓練を得ること、蓋し最大なるものがあろう。吾人の信する處によれば、高等女學校卒業後數年の時期は、女子の精神的陶冶訓練を與ふるに最も効果多き時である。而して、その爲には教

説に訴ふるよりも、實地の上によりき指導を興へ得るならば、其の効殊に著大なのである。換言すれば、よき經驗を經驗せしめるを最も有益とするのである。

子供の世話は詩の如き一面を具ふると共に、又甚だ現實なる一面を持つものである。一口に言へば、多くの勞苦と又面倒と、殊に非常なる忍耐を要することである。更に極言すれば、子供の爲に我を献げて奉仕せなければ出來ないことである。

其の勞苦と忍耐と而して犠牲と、我が精神の訓練の上に何たる貴くして幸なる經驗であらう。況んや母校の師君は、其の間に周到なる指導を興へて其の一日々々を自ら獨りして味ふよりも意味深き

ものたらしめらる。何たる活きた補習教育であらう。

世には、眞に自己を訓練せんが爲に、或は慈善病院の看護婦となり、或は白痴院の助手となり、以て自己の愛心を試み又之れを純化せんとする篤志家も稀ではない。高等女學校卒業者が、幼稚園に入つて勤勞に服する如きは、之等の人々に比して、敢て言ふに足らぬ容易さである。しかも、程度こそ違へ、得來る精神上の利益は、聊か相似たりとも言ふを得よう。

若し又、學校の指導施設完きを得て、之れに幼稚園保母たるの免狀を興ふるを得ば、又他の意味に於て好都合なる點も尠くない。

『ポール・ドンビー』（ヂッケンス） (三)

英文學に現はれたる子供 (二十一)